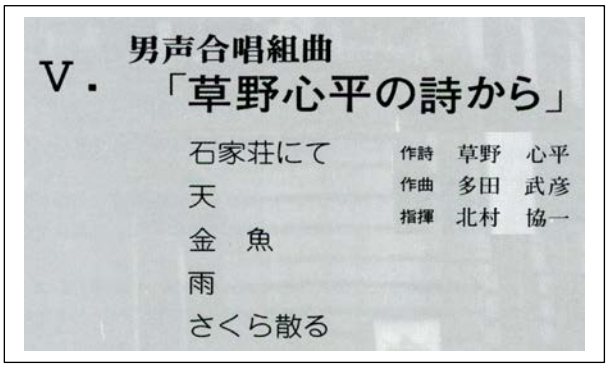
58th RECITAL 【1990 年（平成 2 年）1 月 27/28 日】 神戸文化ホール/フェスティバル



男声合唱組曲「草野心平の詩から」

作詩者 草野心平について

草野心平（1903年～1988年）詩人。

福島県石城郡上小川に生まれる。

慶応普通部中退。大正10年から14年まで中国広東に在って嶺南大学に学ぶ。同地で「銅鑼」創刊。黄瀛、原理充雄、宮沢賢治、坂本僚、土方定一、尾形亀之助らが同人となった。帰国とともにさかんに詩作し、第一詩集『第百階級』（昭 3 刊）をだした。

昭和 3 年末から 5 年まで前橋に滞留、地元の新聞社の校正係をしながら、伊藤信吉らと『学校』をだし、同地在住の萩原朔太郎、萩原恭次郎らと往来した。この当時はアナーキズム系詩人の傾向が最も顕著な時期で、思想的であるよりも芸術意識というべきものが強烈でその後はこの傾向を深めて『絶景』（時15刊）『富士山』（昭18刊）などをだした。

作曲者からのメッセージ

ハーモニーへの郷愁　多 田 武 彦

90周年記念演奏会のメッセージで、日下部吉彦先生が「戦後まもない頃の関学グリーの印象は、何といっても重厚なハーモニー。とくに低音パートのひびきはすばらしく……」という趣旨のことを書いておられた。あれから40年経ったいまでも、私も日下部先生と同様、あの「ピッチの合ったベースの上に積み重ねられたハーモニー」に、病的なほどの郷愁を感じている。この伝統は、林雄一郎先生が指揮をされていた頃から構築されはじめたときいているが、三大要素の一つである和声は、画で言えば色彩。これが、作曲家の魂の一部として展開していたのだから、作曲家たちも生きていたらさぞかし嬉しかっただろう。

ところで、これらのハーモニーの美しさは、各パートがノン・ヴィブラートで歌っているときに、特にすさまじさを発揮する。何年か前、ある民族音楽の大家の先生が、ブルガリアン・ヴォイスの和音のすごさを賞讃されていたが、その先生がその時点でそう思わなければならなかったほど、三大要素の中のハーモニーの構築はむずかしく、ともすれば、旋律とリズムだけで音楽が形成され、和声不在の演奏が横行する。私に云わせれば、「関学は昔からきちんとやってるよ。」ということになる。これを書くと、必ず「純正調がどうの」という話になるが、そうではない。三度のハーモニーは、純正調であろうと平均律であろうと、よくひびく。問題は、一つは、パートのピッチが合っているかどうかということ。もう一つは、五度と四度がハモっているかということ。私はいろいろなところへ教えに行ったとき、パート・リーダーに皆の前へ出てもらってこれを試みるが、すぐハモらない。しかし、しばらくするとさすがパート・リーダー、出来てくる。

組曲「草野心平の詩から」も、ずい分多くの名演をしてもらった。ただ、作曲家の心残りは「全部でなく、たとえば、金魚の冒頭や再現部。あるいは、平行四度の部分」など、色彩感を強調したいところで、ハモってくれないこと。ハーモニーは、音程を正しく歌っても出てこない。他のパートが微妙にゆれ動くと完成しない。要は、作曲家の描いた色を、メンバーのみんなが知っていないと、瞬間瞬間で即応出来ない。関学グリーは、いつも、この妙技をこなす。今宵も、心平先生の大琉金が、しずかにゆらめくことだろう。